

張志和の『漁歌子』と白居易の『憶江南』

報告：寺西俊英

今回ご紹介するのは、中唐の詩人・張志和の『漁歌子』と、中唐から晩唐にかけての詩人・白居易の『憶(憶)江南』の二首で、いずれも〈詞〉です。

まず張志和の〈詞〉から見て行きましょう。張志和は日本ではあまり馴染みのない詩人ですね。彼は732年に浙江省で生まれ、774年に42歳の若さで亡くなっています。彼の生れた時代は唐の全盛期であり、玄宗皇帝(在位712年～756年)の「開元の治」の時と重なります。また玄宗皇帝に仕えた阿倍仲麻呂をはじめ遣唐使が行き来していた時代でもありました。張志和が若くして科挙に合格したのはその頃でした。

しかし玄宗治世の前半期(開元年間)は良き時代でしたが、後半(天寶年間)は玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛するようになって次第に政治に身が入らなくなり、それと同時に世の中が乱れ始め、ついには755年、安祿山の乱が発生し、楊貴妃は殺され、玄宗は退位を余儀なくされます。

玄宗の退位後、肅宗のもとで彼は一度左遷の憂き目に遭いますが、まもなく許されて中央に復帰します。しかし理由ははっきりしませんが、最後には官吏の身分を捨て故郷に帰り隠遁生活

に入り、そのまま亡くなりました。隠遁先では、政治家で書家でもある顔真卿と親交を持ちました。「漁歌子」は彼が顔真卿と意気投した時の作品と言われています。顔真卿は剛直な性格であったようで、時の権力者の楊国忠(楊貴妃の従兄)に疎まれて地方官に左遷されたりしていま

すが、張志和もおそらく政治的妥協を潔しとしない硬骨漢であったのではと推察されます。ただし、彼の生涯については伝聞によるものが多く、生卒年をも含めて、必ずしも明確ではありません。顔真卿との交遊もあるいは後世の創作かも知れません。いずれにしろ資料は極端に少なく、残された著作も、この作を含めて「漁歌子」五首だけです。

ところで10月号では、〈詞〉とはどんなものか分かり易く解説されていますが、要するに〈詞〉とは楽曲の歌詞のことです。それぞれの楽曲名を総称して「詞牌」と言

います。そして作品の内容と詞牌の名称は必ずしも一致しません。たとえば「卜算子」(10月号参照)というのは、詞牌の名称であって作品の内容とは特に関係ないということでしたね。ところが「卜算子」の場合と異なり、今回の「漁歌子」は作品の内容も、漁をする人(張志和自身?)のことを詠んだもので、詞牌と一致して



張志和(百度百科から)

いるのです。〈詞〉とは唐の時代に発生し、宋の時代に完成されたジャンルと言われているのですが、植田先生から「〈詞〉はもともと〈曲詞子〉と呼ばれていて、妓女たちが民間のメロディーに合わせて歌っていたもので、日本でいえば端唄や都々逸のようなものですね。これを知識階級の詩人が作ったのは彼が初めてではないかと言われている。詞牌と内容が一致したオリジナルと言えるでしょうね」とお話し頂きました。

ちなみに「漁歌子」というこの作品は中国ではとても有名で、多くの人がこのスタイルに倣って作詞しているそうです。

yú gē zǐ
漁歌子
zhāng zhì hé
张志和

xī sài shān qián bái lù fēi
西塞山前白鹭飞
táo huā liú shuǐ guì yú féi
桃花流水鳜鱼肥
qīng ruò lì
青箬笠
lǜ suō yī
绿蓑衣
xié fēng xì yǔ bù xū guī
斜风细雨不须归

せいさいざんぜん
西塞山前白鹭飛び

とうかりゅうすいけいぎよこ
桃花流水鳜魚肥ゆ

じやくりゅう
青き箬笠

さい
緑の蓑衣

しゃふうさいう
斜風細雨帰るを須ず

この〈詞〉は、張志和が気ままな隠遁生活を送っている自分を、降りしきる雨の中、蓑笠つけて釣り糸を垂れる漁師の姿に重ねて詠んだものです。最後の三字「不須归（帰るを須ず）」は、ここでの生活は決して楽ではないけれど、汚れた役人生活よりは遙かにましで、過去の生

活には二度と戻りたくないという気持ちを込めたものだそうです。

作品の内容ですが、西塞山は浙江省の紹興にある山で、「前」とは麓のことです。そこにある川で釣りをしていたら桃の花びらが流れて来たり、水中に魚影が見え隠れします。鳜魚とは桂魚とも言って中国料理によく出る川魚だそうです。漁師は青いササで編んだ笠を被り、緑の蓑を着ています。風が吹き、雨が降っても帰らず魚釣りに勤しんでいるのです。

またこの作品には白鷺の「白」、桃花の「桃色」、箬笠の「青」、蓑衣の「緑」の字が配置され、色彩豊かなイメージです。生活の中の彩りを作者自ら楽しんでいるということでしょうか。

植田先生は、色について次のようなお話をされました。「『白』にも色々な白があります。真っ白は『雪白』と表現しますね。『桃花』はピンクがかかった赤色ですね。『青』は、中国語では黒味がかかった青と言う意味があり、例えば『鉄青』とは、ドス黒い青ということです。ご存知のように信号機、日本では以前、進めは青とっていましたが実際は緑色をしていました。いまではLEDで青く見えますが、「青」と「緑」の区別は微妙ですね。それはさておき、ここは雨の中の風景ですから、極色彩でなく、墨絵のような淡々とした色合いを連想するとよいかと思います」と。

次に白居易の「憶江南」を見てみましょう。白居易は772年に河南省・鄭州市で生まれました。字は樂天で、こちらの方がお馴染みですね。号は「香山居士」。自らの詩文集「白氏文集」75巻を完成させたことで有名です。また前述の玄宗皇帝と楊貴妃の愛を詠った「長恨歌」は日本の平安文学に大きな影響を与えています。

yì jiāng nán
憶江南
bái jū yì
白居易

jiāng nán hào
江南好
fēng jǐng jiù céng ān
風景旧曾谙
rì chū jiāng huā hóng shèng huǒ
日出江花红胜火
chūn lái jiāng shuǐ nù rú lán
春来江水绿如蓝
néng bù yì jiāng nán
能不忆江南

江南は好し

風景旧よりかつて諳んず

日出づれば江花紅なること火に勝る

春来たれば江水緑なること藍の如し

能く江南を憶わざらん

この〈詞〉は、遊里の巷でよく歌われたそうで、「望江南」、「夢江南」「謝秋娘」等とも呼ばれます。白居易の「憶江南」は三首連作になっていますが、その中でこの一首が一番有名だそうです。白居易はもともと権力闘争を好まず、晩年には自ら地方官を希望し、各地に赴任しています。例えば杭州では西湖に堤防を築くなど役人として地方行政に尽力しました。このため人々はその堤防を「白堤」と呼び、蘇軾の「蘇

堤」と共に今にその名を残しています。引退前に江南に赴任するわけですが、その当時の気持ちがよく詠い込まれている作品だそうです。植田先生も「私も西湖に行ったことがあります、とても素晴らしいところで、この〈詞〉を詠むと湖の周りをぶらぶらしたことが思い出されますね！」と懐かしそう。

作品の内容は、「江南は素晴らしい。風景は昔見たまま。日が昇れば、川のほとりの花々は火よりも赤く、春が来れば、水の色は緑に輝き、まるで藍染めの藍のよう。嗚呼！何で忘れられよう、江南！」と、実に見事な抒情詩ですね。

さてこの〈詞〉にも「緑」と「藍」の色彩が出て来ます。植田先生は「中国では、『青山緑水』と言いますが、日本では山は緑で水は青いと言って全く逆ですね。この辺りは科学的に分析しない方がいいですねえ（笑）」と言われ、皆さん納得顔。また「日本で『出藍の誉れ』、つまり教え子が師を越えると言う意味の諺がありますが、これは中国語では『青出于藍，而胜于藍』と言います」とも。ちなみに原典は『荀子』勸学篇の「青取之於藍，而青於藍（青は之を藍より取り、藍よりも青し）」です。いずれにしても「青」と「緑」と「藍」の区別は微妙で奥が深そうですね。

最後に付記しますと、日本では空海、橘逸勢と共に「三筆」と言われた第52代嵯峨天皇（786年～842年）が、今回取り上げた張志和の「漁歌子」に倣って〈詞〉を作り、今でもそれが残っているそうです。両者の生卒年から推定すると、ほぼ同時代に当ります。日本人もずいぶん早くから、つまり〈詞〉が中国でまだ一般的に普及する前から、すでにこのスタイルの作品を真似て作っていたのです。遣唐使を通じて、想像をはるかに超える幅広い文化交流があったことが窺えます。



白居易肖像（ウィキペディアから）